

広島市立大学学術リポジトリ

アヘンのような小説、『サイラス・マーナー』：
近代資本主義社会におけるパルマコンとしての言語
芸術

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, 雅樹, HARA, Masaki メールアドレス: 所属:
URL	https://hiroshima-cu.repo.nii.ac.jp/records/8

アヘンのような小説、『サイラス・マーナー』

—— 近代資本主義社会におけるパルマコンとしての言語芸術

原 雅樹

Silas Marner, or the Opiate Novel - Linguistic Art as Pharmakon in Modern Capitalist Society -

Masaki HARA

In George Eliot's fairytale-like novel *Silas Marner* (1861), a baby with golden curly hair suddenly appears before Marner, a miser, when he gets depressed because his gold coins, which he has been saving for years, are stolen. Taking charge of the orphan, naming her Eppie after his mother, and living with her as her father, he finally awakens to the value of love, which money cannot buy. At first glance, it seems that in this novel, Eliot merely criticizes capitalism and asserts the superiority of love over monetary value. It should be noted, however, that one of the causes of death of Eppie's biological mother, a working-class woman addicted to opium, is the neglect by her husband, a landowning-class man, who is Eppie's biological father; and that in the ending of the story, he, with his vast wealth, financially supports Marner and Eppie. What this narrative development implies is that the happy ending, where love links with capital, is based on the exploitation of the working-class mother. In *Silas Marner*, Eliot shows that love, which literary genres often portray as supremely valuable, is in fact inseparable from the violence of exploitation and therefore ambivalent. In other words, love is like opium, a pharmakon, which is both a remedy and a poison.

- I. はじめに——『サイラス・マーナー』における資本主義批判の射程
II. 貨幣と小説の結託

- III. 再生産能力の搾取
IV. アヘンのような小説、あるいはパルマコンとしての芸術

I. はじめに——『サイラス・マーナー』における資本主義批判の射程

ジョージ・エリオット (George Eliot) の『サイラス・マーナー：ラヴィロー村の機屋』(*Silas Marner: The Weaver of Raveloe*) (1861) において、毎日朝から晩まで機を織り続けて稼いだ金貨を愛でることだけを唯一の楽しみとするマーナーの、ラヴィロー村での孤独な生活は、二つの比較的短期間に生じた出来事によって一変する。最初のものは、彼の金貨が盗まれたこと、それに続き起ったのは、金色の巻き毛の幼子が彼の目の前に突如として姿を現したことである。見たところ二歳く

らいのその少女は、雪が降り積もる路上で息絶えた、ほろ着で痩せぎすの母親の抱擁から這い出し、たまたま近くにあったマーナーの家にたどり着いた孤児であると判明する。彼はその子を引き取ることにするが、それは彼女がまるで盗まれた金貨の生まれ変わりのように思われたからだ。が、彼女をエピーと名づけて育ててゆく過程で、彼は金貨への執着から解放され、より重要な別の価値に目覚める。それは、親から子への愛の価値、しかも血縁によらないがゆえに身内びいきの利害関心から離れた、より利他的で普遍的な愛の価値である。エピーとの愛情関係を介して、マーナーはおのずとラヴィロー村という地域共同体のなかに編

み込まれていく。そうして彼は、近隣住民との間に金銭的取引関係とは別の愛情あふれる関係を紡ぎあげ、ついにはより満ち足りた暮らしを手にすることになる。

エピーの登場の描写には超自然的な変身を想起させるところがあるため、一見この小説は、利己的な金儲けよりも利他的な愛が大事であるというありがちな教訓を伝える、子供向けのおとぎ話の一種のように思われる。そうした側面があることはたしかだが、注目すべきは、物語の時空間がいわゆる「むかしむかし、あるところで」ではなく“the early year of this century” (4) に、より具体的にいえば、産業革命期のイギリスに設定されていることである¹。これは、第21章でマーナーがエピーを連れて、彼の故郷の町ランタン・ヤードを再訪する場面において示唆されている。彼にとってまったく予期せぬことに、町の教会は大きな工場にとってかわられており、かつての知り合いも見当たらず、地域の共同性は失われてしまっている。物語がこうした歴史的文脈にあえて位置づけられていることを考慮するなら、それが伝えようとする上記の教訓には、産業革命をきっかけとして形を成した近代資本主義への批判が含まれているといえるだろう。金貨もその一種であるところの貨幣にもとづいた経済は近代以前からあるが、近代資本主義の特徴は資本の増殖それ自体を主目的とすることであり、その帰結として、売れるものならほぼどんな事物でも商品化されるため、人々は貨幣なしで生活を成り立たせることが極めて困難になる。にもかかわらず、貨幣を合法的に独力で得るには商品の売買で成功をおさめるしかない。よく知られているように、産業革命期のイギリスでは、こうして貧富の差が拡大しはじめ、富者は貧者を労働力商品とみなして可能な限り安く買い叩き、搾取することで利益を上げてますます裕福になってゆき、ついに両者は資本家と労働者という階級に分裂し激しく対立することになった。作者エリオットは、社会におけるこうした緊張感の高まりを背景に、この小説をつうじて資本主義批判を展開し、共同性の基礎になる親子愛を貨幣価値よりも重要な価値として提示しようとしているわけだ。

このことは、エリオットの諸作品の中でも比較的マイナーなこの中編小説を研究対象とする決定

的な理由となる。一般的に、イギリス文学史において彼女は長編小説の作家であって、代表作は1871年から72年にかけて発表された大作『ミドル・マーチ』とされる。だが、メアリ・プーヴィ (Mary Poovey) によれば、文学史を社会・経済史と関連づけるとき、『サイラス・マーナー』は際立って重要な小説として浮かび上がってくる。この小説が出版された19世紀中ごろには、エリオット以外にも多くの小説家が資本主義批判を含む小説を出版していたのだが、“*Silas Marner provides a particularly clear example of the way that mid-century novelists subjected economic matters—in this case, the monetary value of gold—to the alchemy of a moral lesson*” (Poovey 383)、とプーヴィはいう²。そして、小説家たちは、小説の物語内容において貨幣価値よりも重要な教訓を説くことで、小説という文学ジャンルそのものを脱商品化し、より高貴な芸術作品の地位へと高めようとした。小説はもともと、詩や演劇といった近代よりもはるか以前から存在する文学形式とは違って、近代資本主義社会を背景に誕生した新しい文学形式であり、その根本には需要や流行に合わせて市場に流通する娯楽商品としての性質がある。だが、19世紀中ごろに小説家たちは、小説の内容において万物の商品化を批判しただけでなく、小説形式それ自体から商品性を取り除こうともしたわけだ。こうした運動は実は、それよりも半世紀ほど前、18世紀から19世紀にかけて、ロマン派と呼ばれる詩人たちが社会の資本主義化に抗しておこった、詩の価値の再定義運動の、いわば小説版なのである。再びプーヴィを援用するならば、“By associating it with a special kind of value—one not defined by the market—writers like Wordsworth and Coleridge tried. . . to deny that other kind of value that Literary writing continued to have, as a commodity priced by market forces” (Poovey 2)、ということになる。今日、小説が、大学という市場経済とは一定の距離を置く機関において、研究に値する芸術作品として取り上げられているのは、こうした運動の結果に他ならない。『サイラス・マーナー』は、その後の歴史的展開を決定づけた小説の一つなのである。

しかし、『サイラス・マーナー』の文学史的な重要性はそこにとどまるのだろうか。という疑問が生じてきてしまうのは、作中にエピーの母親、

労働者階級のアヘン常用者モリーが登場するためである。エピーは、マーナーに愛の価値を見出させるという点で、物語展開上の核となるキャラクターだが、彼女はエピソード的に突如出現する霊的存在ではなく生身の人間として描かれている。つまり、マーナーがエピーと出会えたのは、他ならぬモリーが彼女をこの世に生み落とし、死の直前まで独りで養育してきたからこそなのだ。加えて言えば、モリーは死によって娘を手放さざるをえなかったのだが、その死の原因には貴族階級の放蕩者の夫ゴドフリーが、少なくとも間接的に、関与している。モリーが死ぬのは、彼女との結婚を世間に隠し、妻子を見捨て、彼自身と同じ貴族階級の女ナンシーと結婚（正確には重婚）したいと熱望しているゴドフリーへの復讐に向かう途上においてなのである。雪の降り積もるなか、彼女は自身を元気づけるためにアヘンを飲むが、意識を失って地面に座り込み、そのまま息絶えてしまう。以後の物語において、彼女について語られることはほぼなくなるうえに、ゴドフリー以外には彼女のことを記憶しているものはいないようである。しかし、というか、だからこそ、マーナーとエピーの愛情関係を中心とする幸福な結末には、死んだ母モリーの影がつきまどっているように思われる。いずれにせよ、この小説の真価は、マーナーとエピーの関係性にゴドフリー、そしてとりわけモリーを加えて解釈することなしには、見えてこないのではないか。モリーの描写に割かれる紙幅が決して多くはないわりには、彼女の人物造形が細かく設定されていることから、作者エリオット自身がそうした読解を促しているように思われる。

本論文の目的は、こうした問題関心のもとで、この小説の資本主義批判の射程を再測定することである。以下では、第一に、資本主義的な貨幣価値と小説的な愛の価値という、この小説が設定する二項対立の間に密かな共謀関係がないかどうかを検討する。モリーを見捨てた夫ゴドフリーが所有する莫大な財産は、物語の結末において、以後もマーナーと親子として共同生活を営むことを選択するエピーの経済的支援にあてられることになる。見方を変えれば、マーナーはエピーとの愛情関係によってむしろ以前よりもいっそう裕福になるといえるわけだ。とすれば、マーナーはモリー

が受け取ってしかるべきだったものを結果的に奪ってしまっているともいえるのであって、幸福な結末は彼女の犠牲によって成立しているのではないか。おそらく、そうであるかどうかは、彼女のアヘン吸飲による死を自業自得として割り切れるかどうかにかかっているだろう。よって、第二に、作者エリオットが彼女を労働者階級の女として人物造形している点を考慮し、アヘンをめぐる文化史研究を参照しながら、この問題を考察しよう。その結果、もし彼女が犠牲者だといえるなら、マーナーはたとえ間接的にであってもゴドフリーの側に立って彼女を搾取しているということになる。ならば、作者はこの小説をつうじて、たんに貨幣に対する愛の優越性をうたえて小説というジャンルを脱商品化し芸術の地位につかせようとしているわけではなさそうだ。こうして、最終的には、作者が示そうとしているより複雑な小説観を浮かび上がらせたい。

II. 貨幣と小説の結託

エリオットは物語をつうじて、資本主義的な貨幣価値と小説的な愛の価値を分離しようとする一方で、ゴドフリーの財産をマーナーとエピーが部分的にはあれ獲得するという結末を用意している。モリーの死後ナンシーと結婚したものの、跡取りとなる子をもつことができなかつたゴドフリーは、いまや大人になったエピーが、マーナーと懇意にしている労働者の男エアロンと結婚しようとしていることを知る。すると、彼はマーナー家を訪問し自分がエピーの実父であることを明かし、財力にものを言わせてマーナーからエピーを取り返そうとする。もちろん、彼はエピーを買戻せない。エピーは彼女自身の断固たる意志でマーナーの娘であり続けることを選ぶからだ。あきらめて帰宅したゴドフリーが妻ナンシーにこぼす言葉、“there’s debts we can’t pay like money debts, by paying extra for the years that have slipped by” (169) には、作者が物語全体をつうじて伝えようとする教訓が端的に表現されている。親子愛は、貨幣で買えないほど豊かな価値をもっているというわけだ。ところが、興味深いことに、その後ゴドフリーとナンシーは、エアロンを新たに夫としマーナーの家で暮らし続けるエピーを経済的に支

援するという展開となる。なぜ作者は、それまで分離しようとしてきた貨幣と愛とをここで結合させてしまうのか。それは、以下で見ていくように、作者がたんに中途半端だからではなく、厳密に理論的だからである。両者は構造的に同様の論理によって成り立っているため、結合するのはむしろ当然のことなのだ。

それが当然であることは、作者が両者を分離しようとするやり方を詳細に分析することで理解可能となる。彼女の分離の操作は、実は先に見た方法よりも複雑なものである。彼女は、貨幣と愛の対比に、文字通り性（事実性）と隠喩性（虚構性）の対比を重ね合わせている。理論的にいって、貨幣は文字通り性をもたなければ機能しない。どんな貨幣であれ、それが文字通りにある一つの意味だけを指示しなければ、それ自身でなくなってしまう。たとえば、1ギニー金貨は1ギニーの交換価値を文字通りに意味しなければ、貨幣としては機能しなくなる。その意味は額面通りに受け取られねばならず、多様な解釈が許容されてはならないのである。むしろ、貨幣が金貨の場合のように貴金属からなるか否かは、本質的な問題ではない。紙幣や電子マネーの流通はそのことを端的に証明している。貨幣において重要なことは、その意味するものとその指示内容の一对一対応という文字通り性が維持されることなのである。作中では、注目すべきことに、マーナーはエピーとの出会いをつうじて、そうした貨幣的な文字通り性の世界から、隠喩性によって可能となる愛の世界へと移行する。

彼がいつのまにか家の中に入ってきていた幼子を発見する様子を、作者は自由間接話法によって次のように描く。

... he seated himself on his fireside chair, and was stooping to push his logs together, when to his blurred vision, it seemed as if there were gold on the floor in front of the hearth. Gold!—his own gold—brought back to him as mysteriously as it had been taken away!... He leaned forward at last, and stretched forth his hand; but instead of the hard coin with the familiar resisting outline, his fingers encountered soft warm curls. (108-9)

この引用箇所を含む一節をどう読むについては、プーヴィによる優れた分析を参照しよう。

... this passage paves the way for the child to *become* gold in a manner that differs from the literal sense Marner initially imagines. For, the story unfolds, the value that most people would attribute to literal gold, and that the word *gold* would ordinarily denote, migrates to the child, where it is transformed into an altogether different kind of value. Thus, ... he [i.e. Marner] gradually learns that gold is not necessarily literal or limited to the coins the word usually denotes. (Poovey 382)

言い換えれば、ここでマーナーは金色の巻き毛の幼子をたんに金貨と誤認するというよりはむしろ、その想像力によって実際にはまったく別々の両者を隠喩的につなげるのだ。そして、両者が同じものであるというその虚構を自身のうちに保持し続けるがゆえに、彼は彼女を引き取り育てることに決めるのである。

Marner took her on his lap, ... Thought and feeling were so confused within him, that if he had tried to give them utterance, he could only have said that the child was come instead of the gold—that the gold had turned into the child. (120)

すると今度は、彼は彼女に彼自身の妹の呼び名であるエピーという名前を与えるのだが、そもそも妹の正式名はヘッジバーであって、それは彼自身の母親の名前からとられたものなのだ。このように、金貨＝幼子＝妹＝母親という想像的隠喩連関に基づく虚構をつうじて、次第にエピーは彼の愛すべき娘となっていくのである。これと同様のプロセスは、エピーの側にもみられる。エピーにとってマーナーははじめのうち、たまたま入り込んだ家の住人にすぎないという点で、まったくの他人である。しかし、その他人は、彼女を愛情をもって育てゆく過程で、彼女にとって愛すべき父になっていった。二人が親子になったのは、自然的な血縁によってではなく、人工的な虚構によってなのである。

金貨では交換不可能な至高の価値、愛が芽生えてくるのは、このように、金貨が文字通り性を失っ

て豊かな隠喩性をおびはじめるところからなのだ。そして、作者はその隠喩性を貨幣に対する小説の優位性として暗示する。マーナーとエビーを固く結びつける“perfect love” (241) にかんする語り手の解説、“Perfect love has a breath of poetry which can exalt the relations of the least-instructed human beings; and this breath of poetry had surrounded Eppie” (242) に注目しよう。ここでいう“poetry”とは、同時代の小説家たちにとって小説というジャンルが目指すべき理想像、脱商品化した芸術作品の模範例に他ならないといえる。

しかし、エリオットもおそらく自覚しているように、こうした分離は実はある理論的な難点を抱え込んでいる。貨幣価値は、もともと事実なのではなく、市場を流通する過程で自然化することによって事実へと生成変化した虚構なのである³。虚構性こそが貨幣の事実性を産み出すといってもいい。一般に、貨幣は希少で高価な何らかの実在物の代理として、取引を容易にするための便利な道具であると考えられることが多い。ある貨幣がある一定の価値を文字通りに指示するのは、その起源としてそれ自身と分かちがたく結びついた価値ある実在物をもつからだ、というわけである。しかし、仮に出発点においてはそうだとしても、不換紙幣や電子マネーの例が示すように、貨幣は流通するうちにその起源から遊離して自己増殖し、やがて完全に自律する。これは、言い換えれば、貨幣価値の文字通り性が無根拠になるということである。ある貨幣がある価値を文字通りに指示するという事実自体が、恣意的な約束事ではなくなる——虚構になるわけだ。だが、その虚構性は直視されてはならない。貨幣が交換価値を失って無用の長物になってしまいかねないからだ。不換紙幣の場合でいえば、文字や数字、図像が印字された紙きれにすぎなくなるおそれがあるからだ。したがって、近代資本主義社会においては、貨幣が文字通りの価値を持つことを人々が事実として認識するように、自然化の作業が行われてきた。プーヴィは、“in the course of the eighteenth and nineteenth centuries, money, as a general kind, was so effectively naturalized” (Poovey 4) と述べる。そして、プーヴィによれば、こうした自然化において中心的な役割を果たすべく誕生したのが、経済学とそれを一般に普及させる経済ジャーナリズム

ムという、相互に結びついたジャンルである——“In the genres associated with economic writing, writers elaborated the category of fact. . . as a way to make market transactions seem as regular and harmonious as nature” (Poovey 6)。しかしながら、貨幣の本質に虚構性があるということは理論的現実なのであって、たとえば新しい貨幣が誕生するときには虚構性に強く依存せざるをえない。ゆえに、近代資本主義社会においては虚構を専門的に担うならかの部門を構成し、人々を虚構性に慣らしておく必要がある。18世紀から19世紀への転換期におけるロマン派の詩、そして19世紀中ごろの小説こそが、まさにその役割を結果として担うことになったのだ。

当時を生きる人々の中でこうした全体像を掴み、その中における自らの役割を自覚できた人はおそらくいなかっただろう。だが、作者エリオットは稀有なことに、貨幣と小説が表面的には対立しつつその裏では手を結んで資本主義社会を支えているという構図を、少なくとも直観していたように思われる。マーナーとエビーの愛がゴドフリーの財産を引き寄せるという物語展開の構成がその有力な証拠である。とすれば、作者は、貨幣に対する小説の優越性を説きながら、他方ではその後ろ暗い側面をも同時に提示しようとしているといえそうだ。というのは、すでに述べたとおり、エビーを産み育てたモリーは、死の直前に妻子を見捨てた夫ゴドフリーに復讐を果たそうとしていたのだから。物語の結末においてマーナーもエビーもそのことに一切触れないが、モリーの死に様を記憶している読者の視点からすれば、本来マーナーの位置にくるべきはモリーなのではないかという疑問を抱くのは不自然なことではない。ということは、作者が描こうとしている構図は、貨幣と小説の対立というよりはむしろ、密かに結託した両者とその外部——モリーによって体现される何か——という対立なのではないか。次節ではこの問題を考察しよう。

Ⅲ. 再生産能力の搾取

モリーが大団円を成立させるための犠牲として描かれているといえるか否かは、彼女の野垂れ死にがどの程度彼女自身の責任によるものとして描

かれているかにかかっている。すでに述べたように、彼女はたしかに彼女自身によるアヘン吸飲によって意識を失ってしまった結果凍死する。だが、ここで拙速に自己責任論を持ち出すのではなく、作者エリオットによる彼女の人物造形を詳細に検討してみるべきだ。以下で見てゆくように、作者は表向きモリーに責めを帰しているようであり、注意深く読めば反対に、彼女の弁護が可能になるように文章を構成している。最終的に明らかになるように、作者のそうした回りくどさは、モリーという、階級のかつジェンダー的なマイノリティである労働者階級の女を擁護することの困難さに密接に関係している。言い換えれば、作者は近代資本主義社会をその他者であるモリーの視点から捉えるという困難な課題に取り組んでいるのだ。

まず、議論の大前提として確認しておきたいのは、モリーによるアヘン常用は娘に対する愛情の欠如の表れとして描かれているわけではない、ということだ。たしかに作者は、モリーがゴドフリーとの夫婦関係を公に暴露するために、父親似の娘を証拠として利用しようと考えていることを示唆する。しかし、“lingering mother’s tenderness” (105) や “mother’s love” (106) といった表現によりモリーの愛情は繰り返し言及される。さらに、彼女の死後の様子、“her arms had not yet relaxed their instinctive clutch” (106) という表現には、彼女の強い愛情が示唆されている。ゴドフリーとは違って、彼女は死んだ後でさえも娘を守ろうとしている、というわけだ。その後の物語はマーナーのエピーへの愛情が報いられるという方向に展開するが、子への愛ならモリーにもあったのである。

だが、たとえそうだとしてもモリーによるアヘン常用は母親としての自覚の欠如を、ひいては愛情不足を示しているのではないか。おそらくこうした反論を想定し、作者は彼女が「アヘンという悪魔」(“demon Opium”) (105) に苦しめられているという趣旨の説明を用意している。彼女がアヘンを手放せないのは、彼女自身のせいであるというよりはむしろ——あるいは少なくとも、彼女自身のせいであるのと同程度に——アヘンの悪魔的性質のせいなのだ。アヘンを悪魔として擬人化することによって、作者は彼女に情状酌量の余地があることを暗に示しているわけだ。

これに対してさらに反論することは可能であ

る。アヘンが悪魔であるとしても、その悪魔の誘惑を絶ち切れなかったことについてはモリーに非があるのではないかと。しかし、ここで問うべきは、いかにモリーが意志の弱い人物であるかということよりも、なぜ彼女が悪魔の誘惑に負けてしまうような心理状況になったのかということである。作者はこの問いに対する答えとして、“her husband’s neglect” (105) を示唆している。語り手は、モリーのアヘンにたいする憎悪が、いつしかゴドフリーにたいするそれへと変じていたという。これは一見、彼女が彼女自身とアヘンの両者が負うべき責めをゴドフリーになすりつけていることのみを示唆しているようである。が、ゴドフリーがたまたま責任の転嫁先として選ばれたわけではないこと、つまり、妻子を一方的に見捨てた彼の罪の重さを示唆しているともいえる。語り手が自由間接話法を使いながら提示するモリーの感情、“He was well off; and if she had her rights she would be well off too. The belief that he repented his marriage, and suffered from it, only aggravated her vindictiveness” (105) には、決して理がないわけではない。ここに妬みや羨望といったルサンチマンが含まれるとしても、彼女と正式に結婚した夫であるゴドフリーには妻子を援助する義務が、少なくとも道義的な観点からあるといえる。にもかかわらず、語り手によれば“Godfrey, in a fit of passion, had told her he would sooner die than acknowledge her as his wife” (105) というのだから、モリーが精神的な苦痛を負っただろうことは容易に想像される。彼女はアヘンに慰めを求めざるをえないほど夫の仕打ちに苦しんでいたというわけだ。

こうした読解は、ゴドフリーが放蕩者の貴族として人物造形されていることに着目するとき、より納得のいくものになる。彼はマーナーの金貨を盗んだギャンブル狂いの弟ダンスタンとともに、キャス家の放蕩息子として物語に導入される。彼のモリーとの結婚は彼自身の刹那的衝動によるもの、“his own vicious folly, which now seemed as mad and unaccountable to him as almost all our follies and vices do when their promptings have long passed away” (30) の結果なのである。にもかかわらず、彼はナンシーへの熱い思いに身を焦がしながら、モリーとの関係をなかつたこととして隠し通そう

とするばかりか、彼女の死さえ望んでいる。マーナーが雪の中に倒れている身元不明の女を見つけ、医者呼びにキャス家を訪問したとき、ゴドフリーの内心は、“Is she dead?” said the voice that predominated over every other within him. “If she is, I may marry Nancy” (115)、と描かれる。たしかにここでモリーはゴドフリーの被害者としてはっきりと描かれているわけではないが、ゴドフリーが免責可能な人物として描かれているわけではないこともまたたしかなのである。

ここであえてゴドフリーを弁護するならば、モリーは彼と出会う前からアヘンを使用していた可能性がないとはいえないのだから彼女とアヘンとの関係において彼の存在は二次的なものにすぎない、ということはあるかもしれない。しかし、物語の核をなす愛のテーマに関連づけてみれば、彼女こそが愛を必要とする人物なのではないだろうか。彼に見捨てられなければ、彼女は少なくともアヘンを飲んで野垂れ死にし、身元不明の遺体として処理されることはなかっただろう。彼女の境遇は実はマーナーのそれとコントラストをなしている。マーナーが貨幣に執着するようになったきっかけは、友人によって無実の罪を着せられたうえに婚約者をも奪われたことにより、ある種の人間不信に陥ったことだ。そしてその状況から彼を救い出すきっかけとなったのがエピーとの予期せぬ幸運な出会いである。他方、モリーはゴドフリーに見捨てられた後おそらくよりいっそうアヘンに依存するようになったのだと考えられるが、その悪魔の手から救い出してくれる奇跡的な出会いが彼女に訪れることはない。こうした対比から見えてくるように、モリーは愛に値しない人物であるというわけでは決してなく、愛を必要としながらそれを得られなかった人物として描かれているのである。

この読解に対して、モリーは、マーナーがそうしたように、娘との間に愛情関係を築くこともできたのに、実際にはそうしなかったからのだから救われなくて当然である、という反論が提起されるかもしれない。が、そうした反論は両者の間にある重大な差異を見落としている。両者はともに労働者階級に属するが、マーナーは男でありモリーは女である、というジェンダー上の決定的な違いがあるのだ。産業革命をきっかけに社会が本

格的に資本主義化してゆく過程で、男は市場で生産し女は家庭で再生産すべきであるという、市場と家庭の領域分割にもとづく男女の性別役割分業制が、中産階級を中心に規範化し社会全体に浸透していったことはよく知られている。この体制において女性の経済的な自立はきわめて困難になった。労働者である夫らのケア、出産や育児といった再生産の務めは雇用契約に基づく賃労働ではないからだ。こうして女性は男性に経済的に依存せざるをえない状況におかれたのである。むろん、男性と同様に女性が家庭を出て労働市場で生産者になれないわけではなかった。しかし、そもそも働き口を見つけるのが困難なうえに、家庭の外を活動の場にするというだけで墮落した女というスティグマを負わされて社会的に排除されるおそれもあった。こうした状況を踏まえれば、モリーの娘に対する関わり方にマーナーのそれと同等のものを求めるのは酷であることがわかるだろう。マーナーがエピーを引き取り育てることができたのは、社会構造上彼が手に職をつけるのが容易であり、現に機織りによって収入を得ていたからだ。他方で、女であるモリーは経済的困窮にあえていた。死体で発見された彼女がぼろ着でやせ衰えていたことはそのことを端的に示している。すでに見たように、モリーにも娘への愛はたしかにあるのだが、愛だけでは食べさせることはできず、飢えに苦しめば十分に愛することもできなくなるのは無理のないことだ。

いや実は、モリーは娘にアヘンを飲ませていないという点で、むしろ愛情深く配慮に満ちた母親として描かれているとさえいえるかもしれない。作品出版の時期は、「労働者階級のなかに、泣く子を黙らせるためにアヘン剤を与える習慣」（村岡 152）が根強くある一方で、それは命を危険にさらす虐待行為である、というその後支配的になっていく社会規範がちょうど芽生え始めていた頃である。当時流通していたアヘン入りシロップの中でもっともよく売れた商品の一つが、ゴドフリー強壯剤（Godfrey's Cordial）という名前だったことからわかるように、多くの人びとはそれを「健康を増進させる強壯剤（cordial）と思っていたのである」（村岡 153）⁴。むろん、19世紀のイギリスにおいてアヘンの日常的な使用は労働者階級に限られていたわけではない。エリオットと同

じ中産階級の文人の例をあげるなら、ロマン派の代表格としてすでに言及したコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) や、『アヘン常用者の告白』 (*Confessions of an English Opium-Eater*) (1856) の著者ド・クインシー (Thomas De Quincey) がアヘン常用者としてよく知られている。少なくとも 19 世紀の半ば過ぎまで、さまざまな種類のアヘン入り商品が街の薬屋のみならず、「食糧雑貨の店や裏町のコーナー・ショップ、ときには靴屋、仕立屋、金物屋、パン屋などの店先」において、万能な鎮痛薬として売られ、「階級を問わず、すべての人びとの生活の中に入りこんでいった」のである (村岡 147)。しかし、こうした状況は 19 世紀中・後期から 20 世紀初めにかけて変わってゆく。その大きなきっかけとなったのが、中・上流階級の知識人、とりわけ医師をその担い手とした、毒物販売の規制をうったえる薬事改革運動と、その成果としての 1868 年の薬事法 (Pharmacy Act) だった。これ以後、アヘンの中毒性およびその大量摂取による意識障害や呼吸困難の症状が強調され、その常用者を専門的に治療されるべき病者としてみなす、現代までつづる社会規範が誕生し、徐々に浸透してゆくことになった。ここで見落としてはいけないのは、上述のとおりアヘンはいずれの階級でも使用されていたのにもかかわらず、この一連の改革は実は “the outcome of the class basis of Victorian society” であって、その政治的な狙いは “the control of lower-class deviance” だったことである (Berridge and Edwards xxviii)⁵。1861 年という、まさにこの改革運動が盛り上がりを見せていたところに『サイラス・マーナー』を出版したエリオットは、そこで作られつつあった医学を中心とする新たな社会規範をモリーのアヘン使用をめぐる描写に反映させ、彼女が自分の娘にアヘンを飲ませることはなかったという物語設定にすることで、彼女を娘想いの母親として描こうとしているのだ。

以上の弁明から、エビーとマーナーの隠喩的爱情関係を中心とし、ゴドフリーの資本によって支えられた、ラヴィロー村という共同体の再活性化は、労働者の女モリーの犠牲のうえに成り立っているといっただろう。彼女が発揮する再生産の能力は搾取されているのである。資本の増殖を可能にする剰余価値は労働者からの搾取によって

生成される、というマルクス主義の理論を取り込んだマルクス主義フェミニズムによれば、そもそもその労働者は女性が無償で産み育てることによって市場に供給されている。資本主義社会は女性の再生産能力を搾取することで成り立っているということだ。この分析は、モリーのケースにもあてはまる。彼女は、ラヴィロー村の次世代を担うエビーを産み育てたのにもかかわらず、いかなる仕方でも報われないまま死ぬ。そして、死後においてさえ、弔いという、貨幣価値を超えたある種の愛の行為の対象になることはない。作者エリオットは、モリーからの搾取により大団円が形成されるという構図が浮かび上がるように、物語を構成しているのである。とすれば、この小説執筆における作者の目論見は、たんに資本主義的な貨幣価値の文字通り性を貶め、小説的な愛の価値の隠喩性を称揚することではないと思われる。最後に、エリオットの真の目的を再検討し、そこに込められているだろうある一つの小説観を浮き彫りにしよう。

IV. アヘンのような小説、あるいはパルマコンとしての芸術

モリーにかんする弁護的描写から推測されるように、作者エリオットの目的はたんに貨幣価値に対する小説的価値の優位を説くことではないだろう。けれども、だからといって、作者はたんに小説的価値を貨幣価値とともに貶めようとしているわけでもないだろう。仮にそれが目的ならば、その手段として小説ジャンルを使うことは自己矛盾でしかなくなる。むしろ、作者がたんにそうした自家撞着に陥っているだけである、という解釈もできないわけではない。が、もしそうではないとすれば、あるいはその自家撞着に何か積極的な意義を見出せるのだとすれば、作者は何を試みているといえるだろうか。それは、小説的価値が貨幣価値と共謀関係にありながらもそこから批判的に距離をとろうとするさまを描くことによって——あるいは小説的価値が貨幣価値から批判的に距離をとろうとしながらも共謀関係をもってしまいうさまを描くことによって——小説的価値の解きほぐしえない二重性に光をあてることだといえる。資本主義的な搾取への加担という暴力性とそれにたいする批判という倫理性、どちらか一方で

はなく、両者の綱引き状態こそが小説的価値の核心として提示されているということだ。

エリオットが『サイラス・マーナー』をつうじて提示しようとする、小説ジャンルのこうした両面価値性は実は、作中においてある具体物として比喩的に表現されている。アヘンがそれだ。一方では、すでに見たように、アヘンは同時代においてとくに医学的観点から心身を荒廃させ場合によっては死に至らせることもある危険な毒物とみなされ、作中では悪魔と表現されている。けれども他方では、よく知られているように、アヘンは古くから鎮痛・鎮静剤として重宝されてきたし、その使用が厳しく規制されるようになったとはいえ現在でも医療用医薬品として取り扱われていることには変わりはない。これが意味するのは、アヘンの本質は、毒であると同時に薬でもあるという両価性であるということだ。あるいは、アヘンは、デリダ (Jacques Derrida) がいうところの「パルマコン」であるといってもよい。物事を、たとえば利か害か、善か悪か、真か偽か、美か醜かというふうな、二項対立で捉えようとする西洋形而上学的な二分法を批判して、デリダは二項対立そのものを産み出す母体となる両価的領域の存在に光をあて、パルマコンという語でそれを概念化した。パルマコンとは、ギリシア語において薬と毒の両方を意味する語 (アルファベット表記では *pharmakon*) であり、薬局や薬学を意味する英単語 *pharmacy* の語源でもある。デリダは、西洋形而上学の基礎をなす古代ギリシア哲学者プラトンの著作の読解をつうじて、パルマコンを次のように説明する。

If the *pharmakon* is “ambivalent,” it is because it constitutes the medium in which opposites are opposed, the movement and the play that links them among themselves, reverses them or makes one side cross over into the other. . . . The *pharmakon* is the movement, the locus, and the play: (the production of) difference. . . . It holds in reserve, in its undecided shadow and vigil, the opposites and the differends that the process of discrimination will come to carve out. (Derrida 130)

作中のアヘンはまさにこのパルマコンであって、

小説ジャンルの両面価値性を比喩的に表す具体的事物として作中に描きこまれているわけだ。この作品においてエリオットは、資本主義的な搾取に関わりながら同時にそれを悪として批判し善を目指す——あるいはその逆もまた然りである——小説ジャンルを、いわば社会体にとってのパルマコンとして捉えようとしているのである。

社会における小説ジャンルの本質であるとエリオットが示唆する、こうしたパルマコンの原理は、実は小説『サイラス・マーナー』の物語展開の構成というレベルにも反映されている。すでに見たように、物語は愛の価値の提示とともに幸福な結末を迎える。けれども、そうした展開を可能にしているのは、いくつかの決定的瞬間における主要登場人物たちの意志作用の不在、麻痺や消滅などであり、その帰結としての偶然の支配である。そして、注目すべきことに、それはアヘンが毒として発揮する効能に他ならない。アヘンが意志による心身の制御を機能不全にし、最悪の場合には人を死に至らしめるということはモリーをつうじて描かれるのだが、同様の状態がアヘンを使用していない主要登場人物たちにも、程度の差はあれ、生じているのである。

物語展開上もっとも重要なマーナーとエビーの出会いは、関係者それぞれの意志の制御を超えた、偶然の産物というほかない。まだ二歳児にすぎないエビーに明確な意志はないのであって、彼女は自らの意志でマーナーの家に入ることを選択するのではなく、本能的に暖かい場所を求めて歩いていたらたまたまそこにたどり着くのである。そして、彼女が家の中に入れるのは、たまたまそのときマーナーが持病の“catalepsy”の発作で意識と五感を喪失し、まるで“a graven image”のようにになっているからだ (108)。ギリシア語で握りしめることを意味するカタレプシス (アルファベット表記では *katalepsis*) に由来する、この強硬症の発作において、意志が機能停止し身体感覚も麻痺して、人は他人からある姿勢を取らされても自己の意志でそれを変えられないほど受動的になってしまう。語り手の表現によれば、マーナーを長年苦しめてきた症状は“a mysterious rigidity and suspension of consciousness, which, lasting for an hour or more, had been mistaken for death” (8) である。つまり、エビーとの出会いの瞬間において、彼は死と区別

できないような状態にあるわけだ。そして、ちょうどそのとき、ゴドフリーもまた偶然に身をゆだね、行為主体性を麻痺させている。語り手が“he would rather trust to casualties than to his own resolve” (27) というように、彼はつねに受け身の姿勢であって、モリーとの関係においてもそれが発揮される。彼は、彼女との秘密結婚を今後も隠し通すかそれとも公にするか悩み続けたあげく、ついに意志による選択を放棄し成り行きに任せることにする。つまり、彼がすることといえば、“hoping for some unforeseen turn of fortune, some favourable chance which would save him from unpleasant consequences”あるいは“trusting to some throw of fortune’s dice” (71)、要するに“the worship of blessed Chance” (72) なのだ。物語をもっと廻り、そもそもマーナーが故郷のランタン・ヤードを去ってラヴィロー村にやってくることになったきっかけを見てみても、そこにはやはり意志の不在と偶然の支配が見出される。マーナーは、友人から着せられた無実の罪を晴らすために教会が実施する裁判に出席するが、その判決は結局“lots” (12) にゆだねられてしまい、そのおみくじの結果彼は有罪の判決を受けてラヴィロー村に移り住むことになる。物語は、その展開のためのエージェントたる主要登場人物たちの意志の働きを毒することによって、見事に完結するのである。この意味で、『サイラス・マーナー』はアヘンの小説とよぶことができるだろう。

ここまで見てきたように、エリオットは『サイラス・マーナー』をつうじて、小説ジャンルは資本主義と結託し再生産能力の搾取に加担しながら同時にそれを批判する社会的パルマコンである、という小説観を提示し、かつ、まさにそのパルマコン性を物語展開の構成というレベルにまで落とし込んでいる。言い換えれば、パルマコン的な物語構成をもつ小説によって、小説ジャンルが資本主義社会におけるパルマコンであることを示そうとしているのである。いうまでもなく、これは、小説家エリオットが小説ジャンルを解毒することを諦めて、否定的な意味で開き直っているということではない。そうではなく、彼女は、脱商品化し芸術作品の地位を獲得した小説ジャンルがそれでもってしまふ毒性に自覚的であろうとし、ま

た、その毒性ゆえに薬にもなるということに活路を見出そうとしているのである。この観点から、最後にもう一度『サイラス・マーナー』を捉えなおすなら、この小説はモリーのような搾取された労働者の女たちの墓標のようなものになっている、といえるかもしれない。この小説はたしかに彼女たちの搾取という暴力に間接的にはあれ関わっているはずであるが、そのことを汚点として隠ぺいする、あるいは意に介さず忘却することなく書き残している。まるで、殺してしまった者の墓を自ら建てて弔おうとするかのように。この小説が愛の物語であるとしても、その中心にあるのは実はマーナーとエビーの愛ではなく、モリーのような労働者階級の女にたいする小説家エリオットの、暴力と切り離せない愛なのである。

注

- 1 以下の『サイラス・マーナー』からの引用は、すべて Terence Cave 編集の Oxford World’s Classics 版 (1996) からのものであり、頁数のみを括弧に入れて記載する。
- 2 エリオットの諸作品における貨幣の主題については、Coleman; Henry も参照。両者はともに、芸術家としての側面がエリオットにあることを否定するわけではないが、それよりもむしろ彼女の資本家とは言わないまでも投資家としての側面に光をあてながら、彼女が資本主義をそのままの外部から批判しているのではないことを強調している。
- 3 貨幣価値の根本に隠喩性あるいは虚構性があることについては、すでに多くの研究が明らかにしているが、なかでも Goux; Poovey; Shell; 岩井を参照。
- 4 “The young man [i.e. Godfrey]. . . shares his name with the most popular brand of children’s opium, Godfrey’s Cordial” (McCormack 101) という指摘がすでにあるように、作者エリオットが作中の登場人物の一人で、アヘン常用者を妻に持つ放蕩者を「ゴドフリー」と名づけたのは偶然とは思えない。作者は、彼がアヘンを常用していないとしても、そうしているに等しいような放蕩生活をおくっていることをほのめかしているのかもしれない。
- 5 19世紀イギリス社会におけるアヘンの位置づけ

については、イギリスの東洋との関係性という観点から議論する Milligan も参照。作中ではモリーはかつてラヴィロー村からそう遠くない町の酒場で働いていたという設定になっているが、彼女の出自については言及がなく不明である。ただ、彼女が黒髪である——エピーの金髪はゴドフリーからの遺伝である——という設定は、もしかしたら彼女にいわゆるオリエントの血が流れているということをはのめかすものなのかもしれない。

参考文献

- Berridge, Virginia and Edwards, Griffith. 1987. *Opium and the People: Opiate Use in Nineteenth Century England*. Yale UP.
- Coleman, Dermot. 2014. *George Eliot and Money: Economics, Ethics and Literature*. Cambridge UP.
- Derrida, Jacques. 2004. *Dissemination*. Translated by Barbara Johnson, U of Chicago P.
- Eliot, George. 1996. *Silas Marner: The Weaver of Raveloe*. Edited by Terence Cave, Oxford UP.
- Goux, Jean-Joseph. 1990. *Symbolic Economies: After Marx and Freud*. Translated by Jennifer Curtiss Gage, Cornell UP.
- Henry, Nancy. 2013. "George Eliot and Finance." *A Companion to George Eliot*. Edited by Amanda Anderson and Harry E. Shaw, Wiley Blackwell.
- McCormack, Kathleen. 2000. *George Eliot and Intoxication: Dangerous Drugs for the Condition of England*. Macmillan.
- Milligan, Barry. 1995. *Pleasures and Pains: Opium and the Orient in Nineteenth Century British Culture*. UP of Virginia.
- Poovey, Mary. 2008. *Genres of the Credit Economy: Mediating Value in Eighteenth and Nineteenth Century Britain*. U of Chicago P.
- Shell, Marc. 1978. *The Economy of Literature*. Johns Hopkins UP.
- 岩井克人 (1998) 『貨幣論』 ちくま書房。
- 村岡健次 (1996) 「イギリス・アヘン小史」『英国文化の世紀4——民衆の文化誌』 研究者出版。

